

## 読書紹介バザールの実際

## バザールの準備

自分で立てたプランに則ってバザールの準備を進めました。先生との相談タイムでは、自分のバザールプランの検討を行いました。また、自分で準備できるものと先生に準備してもらうものとの確認しました。

お店の看板を作る生徒、紙芝居、チラシ、パンフレット、ポスター、かべ新聞などを作る生徒など、一人一人が個性豊かに作業を進めていきました。共通の約束事として、発表テーマとキャッチコピーを何らかの方法で提示することを確認しました。看板に書き込む生徒、チラシやパンフレットに入れる生徒など様々でした。

開店準備ができたところで、同時間帯に発表する生徒同士で3人組をつくり、リハーサルを行いました。一人は話し手、一人は聞き手、もう一人は観察者でありアドバイザーです。

## バザールの開催

クラスを2班に分けて2回行いました。クラス30人で1回につき話し手（お店）が15人、聞き手（お客）が15人です。2回行うことで話し手も聞き手も経験することができます。

友人関係により、聞き手が特定のお店に集中することを防ぎ、話し手には平等に繰り返し説明する機会を保障するために「スタンプラリー方式」をとりました。聞き手は「スタンプラリーカード」をもって、それぞれのお店をまわるようになります。このカードには評価のポイントも入れてあります。そうすることで、評価意識をもたせることができます。

終末段階では、話し手はワークシートを使って自己評価をし、聞き手はスタンプラリーカードに書き込む形で相互評価を行いました。相互評価の観点は、「紹介された本を読みたいくなったか」です。

## 「読書紹介カード」の作成

このバザール方式の欠点は、同じ時間帯にお店を開いた話し手同士は、それぞれの発表を聞くことができないことです。この欠点を少しでも補うために、3人組によるリハーサルに、同じ時間帯にお店を開く者同士で、という条件をつけました。

加えて、同じ読書紹介という表現形式でも、話すことと書くことという違いはありますが、「読書紹介カード」を作成しました。そのねらいは、次の通りです。

- 全生徒分を印刷し、クラスごとに1冊ずつ製本して常置する。
- そうすることで、他のクラスの読書紹介も見ることができるし、読書生活の向上に資することができる。
- 学校の図書館にも数冊常置し、他学年の生徒にも参考となるように配慮する。
- これもまた双方向の活動の一つである。

また、バザールで使用したかべ新聞やパンフレットなども、できるかぎり廊下等に掲示し、他のクラスでも互いに見られるようにしました。